

「都市エスニシティ」論以降のコミュニティ研究

——「場所」と「出来事」の比較研究序説——

阪 口 毅

The Community Studies after “Discovering” Urban Ethnicity: An Introduction of Comparative Research into Places and Events

SAKAGUCHI Takeshi

The concern over communities as the ways of being in the context of post-welfare statism has risen, but the methodological problem of how we capture the “bubbling” communities that cannot be reduced to any institutional organizations still remains. The reason of this difficulties is we have lost a coherent view of communities and feel confused about ambivalent features, mobility and territoriality, of post-modern communities. The previous urban ethnic studies in Japan from 1990's have produced a methodology of community studies focusing on places as clusters of social networks nodes and events as communication processes. It is necessary for community studies after “discovering” urban ethnicity to capture particular cases of events occurring specific places and their latent processes as historical and social conditions.

キーワード：ポストモダン・コミュニティ，都市エスニシティ，場所，出来事，水脈，
可視性／潜在性

コミュニティが達成する不滅性とは、全く変わらないで永遠に続くことではなく、連続しながら減びない、つまり自己同一性を犠牲にした上での連続に立った不滅性なのである。事実、コミュニティとは、その生命を形づくる構成員が、混合を通じて自己同一性を失っていく限りにおいて生き続けるのである¹⁾。(R. M. マッキーバー)

したがって、絶えず自己を再定義していくプロセスと、自分の境界を定める必要との間には、絶えざる緊張がある。概念的には、アイデンティティを考慮する上で、あれかこれかという見方から、あれもこれもの可能性を含み込むような、直線的ではない見方へと移行することが重要になる²⁾。(A. メルッチ)

1. はじめに——「泡立つ」もの

2015年5月、地域社会学会第40回大会が東北学院大学で開催された³⁾。戦後日本の地域研究を牽引し続けてきた岩崎信彦は、第2日目の自由報告部会において、阪神淡路大震災から20年の復興過程を振り返り、「資本主義そのものが災害を生む」と総括した。会場から投げかけられた、「もっと“ポジティブな”事例、復興が“うまくいった”事例はないのか」という声に対し、岩崎は、静かな声で答えた。「鷹取など、うまくいった事例もないわけではないが、重要なのはそういった芽を摘んでしまったことだ」。岩崎の応答は、復興政策への批判であるだけでなく、制度化や組織化の「成功事例」を焦点化しがちな、地域研究の方法論に対する根本的な問題提起であった。

この日の午後には、「国土のグランドデザインと地域社会」をテーマとするシンポジウムが開催された。共有されていたのは、「不均衡発展の是正」を建前とした全国総合開発計画から、「選択と集中」が剥き出しとなった「国土のグランドデザイン2050」への移行を、「福祉国家の終焉」と捉える同時代認識であった。討論者による議論は、「生存の場としての地域社会」の側からの「抵抗の芽」をどこに見出せるのか、という点に集中した。登壇者の一人であった友澤悠季は、次のように応えた。「これが抵抗の主体だということかたちでは“ない”，しかし何もないかと言われたら“ある”。あちこちでポコポコと泡立ってくる活動がある。しかしその評価を今すぐにはできない。それを支えているものは、土地であり、海である⁴⁾」。私たちは、「抵抗の主体」として集合的主体ばかりを追おうとしてしまう眼と身体の動きから、いかに脱することができるだろうか。制度化以前の人びとや小集団の連なりを、特定の 이슈に「賛成／反対」で答えられないような言説以前の心のうごきと言葉を、どのようにして捉えられるのだろうか。

私は友澤の「あちこちでポコポコと泡立ってくる活動」という心象に、岩崎の主著『町内会の研究』の記述との重なりをみる⁵⁾。岩崎は、R. M. マッキーバー (Robert Morrison MacIver) の「コミュニティ／アソシエーション (community/association)」類型を踏まえ、コミュニティをいかなる組織体とも峻別し、町内会を「住縁アソシエーション」と規定する。そして「コミュニティは、永続的なり一時的なりのアソシエーションのなかに泡立っており⁶⁾」というマッキーバーの一節を踏まえた上で、自身の町内会研究を次のように締め括る。

今日、住縁アソシエーションという基本的な組織だけで住民の新たな地域的共同と自治を再生させることは難しくなっている。(……)しかし、その代わりに多様なアソシエーションの活動が行われる可能性が増大している。町内や学区、あるいは職場を越えたアソシエーションやネット・ワーキングが、文化、スポーツから始まって生協活動、無農薬・有機農

産物をめぐる産地・消費地提携，エコロジー運動，平和運動など多様に展開しはじめている。このようなアソシエーション活動との開かれた関係を住縁アソシエーションがこれからのように作っていくか，それが今後のもっとも大きな課題であろう。（……）人々は生活のさまざまな苦難の経験を経ながら，日本社会の民衆的で自治的な再建のために，一方で町内会＝住縁アソシエーションの存続に努力し，他方で多様なアソシエーションの創造の営みを発展させるだろう。このような営為のなかから必ずや真のコミュニティが泡立ってくるはずである⁷⁾。

岩崎の探究する「泡立つコミュニティ」は，未だここに無いもの，規範概念としての「地域コミュニティ (local community)」である。それは町内会という一般的な共同関心に基づく「住縁アソシエーション」を基礎としながらも，特定の地理的領域を越えた拡がりを持つ「多様なアソシエーション」の連なりを「枠組の構造」⁸⁾として産み出される，人々の社会関係の総体 (coherence)⁹⁾である。こうしたコミュニティの総体性について，マッキーバーもまた「コミュニティの全実在を理解するためには，人々が参与する無数の形をなさない諸関係にも注意しなければならない。（……）そのような関係によって，誰もがあらゆる他者との遠近の度合を異にした接触をもち，誰もが完全に理解することの出来ない連帯と相互依存の関係に参与するのである」¹⁰⁾と述べる。「コミュニティの全実在」すなわち総体性は，組織体に包摂されない「無数の形をなさない諸関係」をも含み込んでいるのである。

もし地域研究において，制度化や組織化の「成功例」と同じくらい，それ以前の，あるいはその可能態としての「抵抗の芽」「泡立つ活動」にも眼を向ける必要性を認めるのならば，岩崎が町内会研究の先へと洞察を進めようとしたように，アソシエーションを経験的研究の足場としながらも，その「隙間」「裂け目」¹¹⁾へと足を踏み入れなければならないだろう。本稿が主題とするのは，そのためのコミュニティ研究の方法論である。ただしそれは，「住縁アソシエーション」を基礎とする「地域コミュニティ」に限定されるものではない。次章で述べるように，高い移動性を持つ都市社会において，社会空間や社会関係の境界を所与の実体として扱い，コミュニティを「地域」に囲い込むことは認識論的にも方法論的にも困難なためである。岩崎もまた，日本の地域研究が，コミュニティ研究を「地域コミュニティ」研究に切り詰める傾向にあったことを批判的に振り返っている。

（……）Community概念については，あまたの定義があるが地域性と共同（感情）性の2つだけはすべてに共通であった，という当時の研究を受けて，その後はこの2つさえ押さえておけばよいという雰囲気になり，政府のコミュニティ政策が進めるコミュニティとcommunity概念をとりたてて区別することなくカタカナの「コミュニティ」としてオーバー

ラップさせてしまったように思う。そのために、研究対象は地域コミュニティへと限定されていき、議論も、コミュニティがどこまで自治の主体でありどこまで政府による住民統合の手段であったかという、政策評価をめぐる論題を越えてダイナミックに展開することはなかった。社会のさまざまな場面に生じる社会関係や社会運動のなかに、communityがassociationと相互作用し緊張をはらみながら、豊かに展開するという事象を掘り起こしていくことを阻害してしまったのではないか、という憾みが残るのである¹²⁾。

コミュニティの存在論的な総体性と概念としての包括性は、岩崎が逆説的に述べているように、「地域」のみならず、多様な社会関係の拡がりや市民活動・社会運動の連なりへと探究を進めていく可能性を内包していたのではないだろうか。すなわち、地域研究と社会運動研究との交点としてのコミュニティ研究の可能性である。そこにはポスト福祉国家という状況において、人々の「生存」を支える「泡立つ活動」の「芽」もまた捨象されることなく、不可欠な要素として含み込まれている。

しかし他方で、こうした組織体に還元されない現象——「無数の形をなさない諸関係」——をどのように捉えるのかという方法論上の問題は、依然として残されている。第2章では、コミュニティ研究の系譜を概観し、総体的(coherent)な視点の重要性を論じた後、今日直面している方法論上の困難を、移動性(mobility)と領域性(territoriality)という「ポストモダン・コミュニティ」の両義性をめぐる問題として析出する。第3章では、移動性の問題を組み込んだコミュニティ研究の先行例として、奥田道大グループと広田康生の「都市エスニシティ」論の知見を再検討し、「場所」と「出来事」への着目と、コミュニティ研究の時間論的な転回の必要性について論じる。なお本稿の基本的なアイデアは、中央大学社会科学研究所研究チーム「惑星社会と臨場・臨床の智」(代表、新原道信)が主催する「惑星社会研究会」¹³⁾および「うごきの場」研究会¹⁴⁾の議論を通じて生まれ、深められてきたものであり、今後これらの研究会を基盤とする比較研究として展開されていくものである。それゆえ結論部である第4章では、今後の比較研究へ向けた方法論の着想を、「場所と出来事の比較研究」として提示する¹⁵⁾。

2. 移動性、領域性、創発性——コミュニティ研究の方法論的問題

2.1 総体的な視点

近代化の過程で、人々の社会関係のあり方がどのように変化していくのかという問いは、社会学の黎明期から一貫して中心的な問題であり続けてきた。資本主義と産業化の進展は都市への人口集中をもたらし、交通網の発達によって居住域は拡大し、高い移動性¹⁶⁾によって特徴付けられる都市社会(urban society)が誕生した。人々がその生涯を通じて結ぶ社会関係は、一定の地理的範域に収まることはない。彼女／彼ら自身もまた出生地から移動し、日常的に居

住地から就業地へと移動し、また余暇活動のために一時的移動を繰り返し、多様な社会関係を結び直していく。あるいは移動性の増大は、社会関係の分断や断片化をもたらすかもしれない。

都市社会における社会関係の変化は、生まれたばかりの社会学にとって大きな関心事となり、シカゴ学派以来の「都市化とコミュニティ」をめぐる研究の系譜が生まれた。シカゴ学派第二世代のE. バージェス (Ernest Watson Burgess) は、その記念碑的作品『都市』(1925年)において、都市社会における移動性の増大が第一次集団の一貫性を失わせ規範(モーレス)を弱めると主張した¹⁷⁾。第三世代のL. ワース (Louis Wirth) は、この命題を「都市的生活様式 (the urban way of life)」論として定式化し、人口規模・密度・異質性の増大によって村落社会を特徴付ける構造的形態としてのコミュニティが衰退すると主張した¹⁸⁾。ワース理論の検証はその後の都市社会学の大きなテーマを形づくっていった。B. ウェルマン (Barry Wellman) らはそれを「コミュニティ喪失 (lost)」「存続 (saved)」「解放 (liberated)」論の三つに分類している¹⁹⁾。自らを「解放」論に位置付けるウェルマンは、コミュニティを「近隣 (neighborhood)」と等値する「喪失/存続」論を批判し、人々の社会的紐帯が織りなすネットワークとして定義し直すことで、都市社会における移動性の増大がもたらす効果を、社会組織の解体 (disorganization) ではなく社会関係の脱領域化 (deterritorialization) として捉え直すことを可能にした。ネットワーク論の展開によって、コミュニティ概念は「近隣」という重石を下ろし、地理的範囲から自由になった。しかし彼らは一貫して、コミュニティを社会関係の構造的形態を指す実体概念と見なしてきたのである。

これに対して、コミュニティの象徴性に着目する理論的系譜が存在する。E. デュルケム (Emile Durkheim) は宗教的祭儀に着目し、その過程で「沸騰」する集合的感情をコミュニティの基礎として分析した²⁰⁾。祭儀における「共通の行為」によって、人々は周期的に集団を再創造し、集団は自己を再確認するのである。V. W. ターナー (Victor Witter Turner) もまた儀礼の過程で生起する同質性や平等性に基づく社会関係のあり方に着目し、社会 (societas) を「構造/コムニタス (communitas)」の弁証法的過程として捉えようとした²¹⁾。A. P. コーエン (Anthony Paul Cohen) はこれらの象徴主義の伝統を継承し、コミュニティを社会関係の構造的形態ではなく、境界 (boundaries) の象徴的な構築として捉えようとした²²⁾。ネットワーク分析においてコミュニティの境界は、ネットワークの粗密の程度から二義的に見出されるものであるが、コーエンにおいてはコミュニティの賭け金そのものである。社会関係が脱領域化すればするほど、コミュニティの象徴性に焦点を置く方法論の重要性が高まると、コーエンは主張する。それゆえシカゴ以来の都市社会学が、前近代/近代ないし村落/都市社会の差異を強調するのに対して、コーエンはその連続性を強調するのである。

コミュニティとは、社会関係なのか、社会集団なのか、それとも象徴なのか。本稿では、こうした還元主義的な見方を回避したい。コミュニティを社会集団と見なせば、組織体の間に広

がる無数の社会関係の網の目を見落とすことになる。社会関係と見なせば、コミュニティの領域性は後景に退き、その実在性 (reality) は失われることになる。象徴に着目する場合においても、相互行為を可能とする社会的条件や、ある象徴が選びとられたり共有されたりする社会過程を見落とすことはできない。重要なのは、還元主義的な見方に陥ることなく、分析的に捉えた諸要素を編みあわせられるような、黎明期の社会学が持っていた、総体的なものを見方を取り戻すことだ。しかしそれは容易いことではない。とりわけ移動性の問題を組み込むとき、コミュニティ研究は方法論上の困難に直面することになる。

2.2 方法論的問題

Z. バウマン (Zygmunt Bauman) は、近代化の過程で「衰退」したと考えられている確固たる実体としてのコミュニティとは、そもそも実現不可能な「夢のコミュニティ」であると主張する²³⁾。それを実現しようという試みは徒労に終わるばかりか、むしろ象徴的な境界を維持するための排除と分離へと帰結することになる。その一方でバウマンは、「流動化する近代」において創造される非実体的なコミュニティについても検討している。それは次の特徴を持つ。

コミュニティは、結合することが容易であったのと同じく、分解することも容易でなければならない。柔軟であり続けなければならない、けっして、追って通知があるまで、「満足が続く限り」といった制約を超えるものであってはならない。その創造や廃止は、コミュニティを構成する人々の選択によって——忠誠の意を示したり引っ込めたりする人々の意思によって——決められなければならない。忠誠の意は、いったん公に示されたとしても、いつでも取り消せるものでなくてはならない。このきずなは選択によって結ばれたものであるが、別の新たな選択に不都合をもたらすものであってはならないし、ましてやそれを阻むことは許されない。きずなは求められるにしても、それを作る人々を縛るものであってはならないのである²⁴⁾。

このような特徴を持つ「既存のコミュニティ」とは異なるコミュニティを、バウマンは「ペグ・コミュニティ」や「祭りのコミュニティ」という表現によって捉える。それは構造的安定性ではなく流動性によって、帰属の強制性ではなく選択可能性によって特徴付けられる。バウマンはこうした非実体的なコミュニティに対し、基本的には悲観的な評価を下す。それは一時的な弱いきずなによって結ばれた集団であり、「支持者の間に倫理的責任のネットワークを形成すること」も、「長期の関与をとまなうネットワークがそこに形成されること」も無いため、「人間のきずなが本当に大事になるとき、すなわち人間のきずなによって個人の資力や能力の不足を埋め合わせる必要が生じるときには、雲散霧消」してしまう存在であるとする²⁵⁾。

このパウマンの悲観主義はどこからくるのだろうか。マッキーバーと岩崎の議論に立ち戻る時、ここでパウマンが問題にしていたのは、実はコミュニティではなく「一時的なアソシエーション」だった、と読みなおすことができるのではないか。パウマンは実体的な組織体としてのコミュニティを実現不可能であると論じながらも、コミュニティの存在様式を組織体として捉える視点に囚われていたのではないだろうか。コミュニティ研究にとって重要なのは、永続的であれ一時的であれ、アソシエーションがくり返し創出されるような歴史社会的条件を捉えることである。

G. デランティ（Gerald Delanty）は、主著『コミュニティ』において、こうした非実体的なコミュニティを「ポストモダン・コミュニティ」として概括する²⁶⁾。それは「自らの再帰性、創造性、自己の限界に対する認識」を特徴とし²⁷⁾、伝統的な形態でもなければ、国民国家や階級への統合という近代的な形態でもない、新たな形態の集団形成である。この「想像される集団形成」を支えるのは²⁸⁾、移動性の増大と帰属の断片化（fragmentation）という不安定な世界のなかで、対話的なプロセスによって構築される「帰属の経験（experience about belonging）」である²⁹⁾。デランティはA. メルッチ（Alberto Melucci）の『プレイング・セルフ』³⁰⁾を参照しつつ、「ポストモダン・コミュニティ」が創出される条件として、「帰属のあり方について語り合う能力」、「想像を生み出す能力」、そして「意味を再生するのではなく意味を産出する能力」、「自己が自らを再生する能力」を強調する³¹⁾。

デランティが対話的な再帰性を強調するのは、移動性と断片化によって特徴付けられた現代社会において、帰属の経験の形態を支える社会的条件——成員の流入／流出や帰属に関する言説の複数性——は絶えず変化し続けており、いかなるコミュニティの「想像」も、「永続的な帰属の形態を提供することはできない」からである³²⁾。それは個別の時間と空間において、個別の形態として、絶えず創出され続けなければならない。ここでもまた、「一時的なアソシエーション」とその創出を支える歴史社会的条件の問題が浮上することになる。そしてデランティの議論は、次の問題提起で締め括られる。

今日におけるコミュニティの復活は、明らかに、場所と関係する帰属が危機に陥っていることと結びついている。グローバル化されたコミュニケーションや、コスモポリタンな政治プロジェクト、国家の枠を超えた移動性は、資本主義が伝統的な形態の帰属を掘り崩すのとまさしく同時に、コミュニティに新たな可能性を付与してきた。しかし、これらの新たなコミュニティ——それは実際には、個性化された成員から構成されるものであり、再帰的に組織された社会的ネットワークである——は帰属に対する希求以上のものではなく、これまでのところ、場所に代わるものとなっていない。コミュニティが場所との結びつきを確立できるか、それとも想像された条件にとどまるかが、将来のコミュニティ研

究にとって重要なテーマとなるであろう³³⁾。

「ポストモダン・コミュニティ」——私はそれを「一時的なアソシエーション」と考える——が創出され続ける歴史社会的条件とは、おそらくここでデランティが述べている「個性化された成員」が「再帰的に組織」する「社会的ネットワーク」であり、こうした構造的条件下で展開される、新たな（その都度の）帰属を構築するような対話的プロセスである。「場所との結びつき」が見出されるとするならば、こうしたネットワーク形成やコミュニケーションが実際に行われる社会空間においてであろう。残念ながらデランティは、構造的条件と対話的プロセスとの実際の連関について明示的に述べてはいない。デランティの「場所」に対する不安は、その方法論上の問題から来るのではないかと、訳者の山之内靖は述べる。

ハーバマスのコミュニケーション論をベースとしながら、さらにそれをポストモダン以後のニューエイジ・トラベラーやヴァーチャル・コミュニティへとつなげてゆくデランティの方法は、ポストモダニズムの潮流にやや過剰に依拠しているところがあると思われる。対話的コミュニケーションやヴァーチャル・コミュニケーションは、それだけでは、現代社会全体を特徴付けている「脱身体的」傾向に対して、明確な対抗の原理をもち得ないのではなからうか。身体的接触を通して初めて成り立つような濃密な相互理解を、ポストモダンの潮流は見えなくさせてきた嫌いがある。「言語論的転回」を中心軸として構築されたポストモダニズムの諸潮流は、言語とそれに依拠したコミュニケーションに過剰なウェイトを置くことによって、身体のコモメントを脱落させてしまったのである³⁴⁾。

人間と「場所」との関わりが見えなくなるのは、身体を介した個別具体的なコミュニケーションの過程を捉えるための方法論が欠落しているからだ、山之内は批判する。移動性の下でのネットワーク形成と、帰属の経験を構築するコミュニケーション過程との連関が浮かび上がって来ないのも、同様の理由によるだろう。

私はこれまで、コミュニティ研究における総体的な見方の重要性を強調してきた。コミュニティとは、社会関係にも、社会集団にも還元されないが、これらを不可欠な要素として構築される「象徴的な境界」であり、デランティに従うならば「帰属の経験」である³⁵⁾。デランティが「想像される集団形成」の境界よりも帰属を重視するのは、移動性の増大によって境界構築の資源としての象徴もまた所与の実体ではなくなり、対話的に選びとられていくべき存在となったからである。本稿では境界と帰属の双方を含めて「領域性 (territoriality)」の概念によって捉えたい。「領域 (territory)」としないのは、デランティが強調するようにその構築主義的な側面を重視したいからである。

都市社会学者の吉原直樹はこうした社会過程としてのコミュニティを、「非線形で常に生成(becoming) 途上にある創発性」の概念によって捉えようとした³⁶⁾。吉原は「ポストモダン・コミュニティ」の議論に依拠しながら、コミュニティを「ヒト、モノ、コトの複合的なつながりから生じる、『一方で開放性を、他方で異質性を』兼ね備えた動的な関係性の総体」と捉え、その領域性を脱色しようとするが、本稿はこれを時間論的な視点を導入することによって乗り越えたい。

ただしここで注目したいのは、吉原もまたコミュニティの総体性を強調している点である。そこにはやはり方法論上の問題が浮上する。デュルケムが考察対象とした部族社会であれば、社会集団に着目することによって、人々のコミュニケーションにおいて社会関係と象徴が絡み合う複合的な社会過程を、総体として捉えることが可能だったかもしれない。しかし現代の都市社会において移動性の問題を組み込む時、新たな経験的研究の足場をどこに求めればよいのだろうか³⁷⁾。次章では、日本の「都市エスニシティ」論の調査実践を事例として、個別具体的な「場所」で生起する「出来事」への着目という方法論の可能性を検討したい。

3. 「場所」と「出来事」——「都市エスニシティ」論以降のコミュニティ研究³⁸⁾

3.1 「コミュニティとエスニシティ」

日本のコミュニティ研究において、移動性と領域性の問題に正面から取り組まざるを得なくなったのは、1990年代の「都市エスニシティ」論の展開以降のことであった。1980年代末の「団塊」としてのアジア系外国人の流入という現象は、大きく二つの方向から捉えられた。第一に、世界システム論や世界都市論の視点からは構造的条件によって移動を促された「出稼ぎ型外国人労働者」として、第二に、地域研究の視点からは「外国人居住者」として「発見」された³⁹⁾。都市社会学者の奥田道大は後者の立ち位置から、当時の状況を次のように振り返る。「超大都市の地域社会レベルを長年にわたってフィールドとする時、いわば『横からのインパクト』としてのアジア系外国人を受け入れる回路と基盤性が開けていた、そのような一つの大きな節目にあった」⁴⁰⁾。「外国人」調査とは異なる方向から設定された「コミュニティとエスニシティ」というテーマには、コミュニティの断片化(fragmentation)として把握される現実を「都市エスニシティ」の観点から再構成していくという展望が込められていた⁴¹⁾。

移住者(新住民)を主体とする新たなコミュニティ形成という奥田のモチーフは、1960~70年代の郊外研究のなかで生まれた。農家(旧住民)と非農家(新住民)の混住地域において、「相互のコンフリクト(緊張関係)を通じて了解される、一筋の脈絡と可能態」としてのコミュニティという問題設定である⁴²⁾。奥田はその可能性を住民運動という「共同の企て」の過程に求めた。1980年代以降、奥田は都心そしてインナーエリアへとフィールドを移し、院生や学部生を含む研究グループは池袋や新宿において「アジア系外国人」調査を積み重ねていった⁴³⁾。奥

田は1990年代の研究蓄積を総括して、「都市コミュニティ」概念を「さまざまな意味での異質・多様性を内包した都市的な場であって、人びとが共在感覚に根ざす相互のゆるやかな絆を仲立ちとして結び合う生成の居住世界」と再定義するに至ったが⁴⁴⁾、その契機は一貫して「“異質”認識を契機とした新しい共同の企て」の過程に求めている⁴⁵⁾。

奥田の「共同の企て」への着目という方法論は、人々の社会関係、社会集団、象徴といったコミュニティの諸要素が絡み合う社会過程を捉える可能性を持っていたが、「コミュニティとエスニシティ」研究において二つの困難に直面していた。

第一に、対象としての「共同の企て」そのものを発見することの困難さである。高度成長期に各地で展開された住民運動は、福祉国家体制の完成によって「冬の時代」を向えることとなる。組織化されたアソシエーションを調査対象に据えて、政治的動員としての「共同の企て」を捉えるのは、次第に困難となっていった。つまり「境界の象徴的構築」, 「対話的な帰属の経験」, 「身体的接触を通して初めて成り立つような濃密な相互理解」として表現されるような、集合的なコミュニケーション過程を捉えるための、新たな対象設定が必要となったのである。

第二に、フィールドが持つ移動性の増大とその多様化である。1970年代の郊外地域が持つ移動性は、基本的には居住地から居住地への移動であり、新住民もまた基本的には定住者であった。これに対して、インナーエリアは居住地のみならず、就業地や盛り場であり、日常的に非・住民を含めた多種多様な人びとが行き交う空間を形成していた。都市社会学者の西澤晃彦が、日本の地域研究は「第一空間(居住地)」⁴⁶⁾としての側面のみを抽象化し「内部の均質化」を行ってきたと批判するように⁴⁷⁾、コミュニティ研究における移動性の捨象は根深い問題であった。西澤は「地域」を与件とするのではなく、諸組織・集団の「間」に「社交空間」を設定し、多様な移動性を持つ人々が「接触し合い、関係を持ち、影響を及ぼし合うこの社交空間に生起する社会過程」を対象とすべきであると主張する⁴⁸⁾。すなわちマッキーバーの「人びとが参与する無数の形をなさない諸関係」を含めた、「動的な関係性の総体」を捉えるための方法論が求められたのである。

3.2 「場所」と「エスニック・ネットワーク」

奥田グループのなかで「コミュニティとエスニシティ」をめぐる方法論上の困難を実践によって乗り越えていったのは、学生たちであった。「アジア系外国人」調査に携わった学生たちのなかには、個別具体的な施設や組織への参与観察を始める者たちが現れた。彼女／彼らは、食材店、レストラン、教会、保育所、親睦団体など、様々な施設や組織で交わされる人々の具体的なコミュニケーションの過程を観察し、記録していった⁴⁹⁾。例えば修士課程の学生であった白岩砂紀は、1990年代初頭に新宿大久保地域の中国系エスニック食材店で参与観察を行い、食材店を結節点とするマルチエスニック・ネットワークの存在を捉えた⁵⁰⁾。白岩は自身の方法論

について次のように述べる。

彼らがこれまでの日本の生活の中で育んできた文化、資本、エスニック・ネットワークは通常、日本人の目に見える形で外側へと現れてくることは少ない。しかし、個々の行動の背後にある不可視的な動きは、様々な場を結節点として四方八方に複雑に絡み合い、かつ広がっている。例えば、学校、教会、寺院やレストラン、食料品店などのエスニック・ビジネスがこうした結節点に当たる。そこに集まる人を通じて、文化、資本、エスニック・ネットワークは着実に広がりを見せている。そうした場にたち、そこから眺めることで、個人の生活からだけでは見えてこない動きが垣間みえてくる⁵¹⁾。

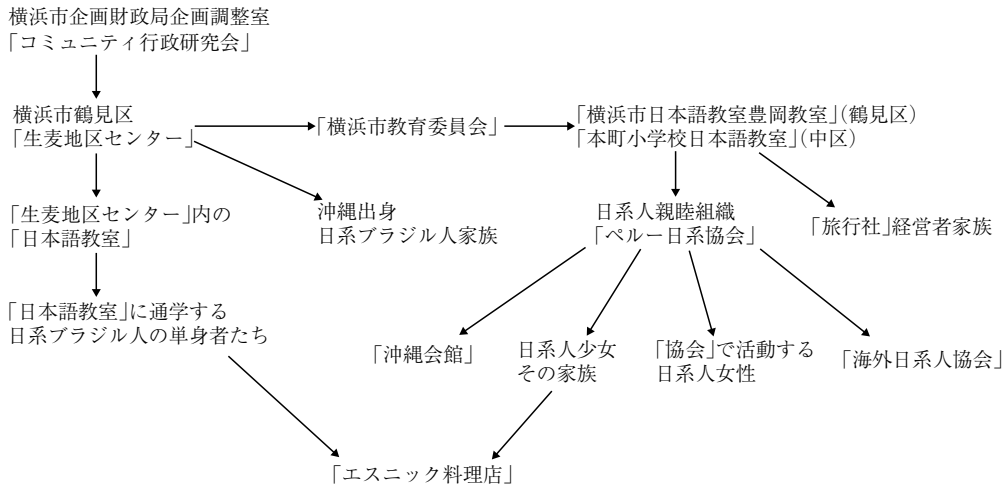
白岩が結果として実践した調査は、個人に焦点をおく聞き取り調査でもなく、組織体に包摂される成員への意識調査でもない、多様な移動性を持つ人々が取り結ぶ関係性の動態を捉える方法論を提起していた。その対象は、移動の焦点、ネットワークの結節点、相互行為が凝集する社交空間としてのエスニック・ビジネスであり、その方法は、長期間にわたる参与観察による徹底的な記述であった。

白岩はこうした方法論によって何を捉えたのか。食材店で働く上海人、タイ人、マレーシア人、日本人という、中国語話者の結びつき。顧客として通ってくる中国人、マレーシア人、シンガポール人、ミャンマー人、ベトナム人、日本人たち。大久保地域を中心とするエスニック料理店への納品という流通のネットワーク。食材店はネットワークの結節点として、様々な利用のされ方をする。ある日、タイ人の従業員は食材店を個人的な「市場」として利用し、同国人相手の独自の商売を始めた。またある日、従業員の募集に際して食材店の情報ネットワークを利用し、近隣の日本語学校教師に仲介を依頼した。ネットワークと結節点の意味は、それが実際にどのような人々によって、どのように利用されているのかを観察することなしに、理解することはできない⁵²⁾。白岩の調査実践からは、ネットワークの結節点で生起する「出来事」への着目という方法論が浮かび上がってくる。

同じ時期、奥田の弟子である広田康生は、横浜鶴見をフィールドとして日系南米人調査を展開していた。広田が捉えたのは、「越境者（エスニシティ）」が織りなす「エスニック・ネットワーク」の広がりであった。日系南米人たちは「エスニック・ネットワーク」を形成し、それを利用しながら、定住者（日本人）の協力も獲得しつつ日々の生活を営んでいた。彼女／彼らの日常実践の蓄積が、国民国家を中心とする既存の制度的世界と衝突し問題提起として現われていく過程を、広田は後に「下からのトランスナショナリズム」の展開として捉えた⁵³⁾。

ここで着目したいのは、こうした多様な移動性を持つ人々が織りなす社会過程を描き出した、

図-1 広田康生の調査経路



出所) 広田康生, 2003『エスニシティと都市〈新版〉』有信堂, 57-58 ページより作成。

広田の方法論である。広田は横浜市行政の研究会が行った地区センターへの聞き取りをきっかけとして、日本語教室などの支援者たちに仲介されつつ、日系人の親睦団体や旅行社、エスニック料理店へと調査を展開していった(図-1)。広田は当時の調査を振り返り、「地区センターを“通路”として通常の『都市コミュニティ調査』では『見えない領域』に接近できることにも気がついた」と述べる⁵⁴⁾。こうした調査経路そのものが、既存の制度的世界と接点を持ちつつ展開する「エスニック・ネットワーク」を辿る調査実践であった。

広田はさらに、あるエスニック料理店を起点として、生成されつつある「エスニック・ネットワーク」の結節点を辿っていった。それはレストランであり、食材店であり、保育所、学校、日本語教室、教会、旅行社、電気工事会社、医院、ボランティア団体であった⁵⁵⁾。こうした「結節装置」の地理的な凝集を、広田は「場所 (place)」の概念によって捉える。「場所」は国民国家の制度的境界を越えて創出される「越境する社会的領域 (transnational social field)」「越境する空間 (transnational social space)」の存在論的基盤である。「場所」は存在様式としては施設や組織であり、特定の社会空間上にその位置を占める。したがって「結節装置」が形成されネットワークが展開してゆく過程を説明するためには、個別事例の背後にある歴史社会的条件が把握されなければならない。こうして「エスニック・ネットワーク」調査は再び地域研究と交わることになる。すなわち「場所としての地域」研究である。

3.3 「場所形成」と「一時的な社会的凝集」

広田はその後、「場所」の歴史的な次元へと探求を深めていった。弟子の藤原法子を共同研

究者として群馬県大泉，東京都新宿，山口県沖家室，布哇ホノルルへとフィールドを広げていくなかで，広田は「場所」が創り出されていく社会的，政治的，文化的過程を「場所形成（place-making）」の概念によって捉え直していった⁵⁶⁾。とりわけ注目したのは，「場所」の象徴的な次元である。「場所」はネットワークの結節点としての施設や組織を存在様式とするが，「場所」に集まり利用する人々によって意味付けられる空間，「記憶」を媒介としたアイデンティティの置き所としての側面を持つという。

しかし一方で，「場所形成」には分離やコンフリクトの契機も内在している。「場所としての地域」には，複数の施設や組織が存在するが，ある個人や集団がその全てを把握し利用するわけではない。あるいは白岩が食材店で観察したように，ある特定の施設や組織の利用の仕方もまた単一ではない。人びとがある「場所」と関わる時，またある「場所」について言及するとき⁵⁷⁾，そこには特定の社会空間に蓄積する歴史・文化的資源からの抽象と象徴化が生じる。それゆえある人びとにとっての「場所」への意味付与と，別の人々にとっての意味付与との間には差異が存在し，「場所（の象徴的）形成」を巡る分離とコンフリクトが生じ得る。広田はこれを複数の「象徴的秩序」「領域化／領域意識」の衝突と交渉として捉える⁵⁸⁾。

「場所」から「場所形成」へと探究の焦点を移していくことで，「場所としての地域」の歴史的な次元が視界に入ってくる。広田は「都市エスニシティ」論を起点とするため，とりわけ先行する「定住者－日本人」と新来の「移動者－エスニシティ」との「象徴的秩序」の衝突や交渉に焦点を置くが，実態としては「移動者」同士，「同じ」エスニシティ同士，移動の歴史を背景とする「定住者（旧住民）」同士が準拠する「象徴的秩序」の差異が存在している。例えば筆者がフィールドとする東京のインナーエリア，新宿大久保地域においては，少なくとも（1）江戸期，（2）明治期～昭和初期，（3）戦後復興期～高度成長期，（4）低成長期～バブル期，（5）1980年代末，（6）2000年代以降の六つの人口移動の「波」が歴史的な〈移動の地層〉が存在しており，移動の時期にエスニシティの差異を加えた複層的／多面的な「新／旧住民」カテゴリーを構成している⁵⁹⁾。あるいは大久保地域を利用するあり方——「第一／第二／第三空間」いずれとして利用するのか——によっても，「場所」への意味付与は異なる⁶⁰⁾。「第三空間」において増殖する「下位文化」の複数性を含めれば，特定の社会空間において極めて多様な「場所形成」の過程が，衝突あるいは併存していることになる⁶¹⁾。白岩はすでに1995年の時点で同様の考察を行っている。「日本人と外国人にとって，そして居住者と外来者にとって，それぞれが異なった意味において大久保地区を認識している。（……）それらの総体として大久保地区という地域社会が重層的な意味を持ちうる場として存在している」⁶²⁾。広田が提起した「場所形成」の複数性というテーマは，「都市エスニシティ」論を潜り抜けたコミュニティ研究にとって重要な論点であり，移動性と領域性の問題に取り組むための方法論を示唆している。

「場所形成」への着目は，構築主義的なコミュニティ研究と「場所としての地域」研究との

接点となる。人々の「記憶」を媒介とした「場所」への意味付与の過程は、デランティが焦点を置く「対話的な帰属の経験」の構築として捉えられるだろう。また「場所形成」をめぐるコンフリクトの過程は、コーエンが強調する「象徴的な境界」の構築と捉えられるだろう。

ただし「場所」の象徴的次元への焦点化には、一方で注意が必要である。「場所」の存在様式である施設や組織が設立され存続すること、移動する人々が「場所」に集まりコミュニケーションが可能であることの背後には、明らかに社会的条件が存在するからである。広田自身が述べているように、「場所形成」の過程は意味をめぐる衝突と交渉であると同時に、「象徴的な秩序を創り出す集団的な実践同士の衝突と交渉」でもある⁶³⁾。つまり「場所」についての人々の語り、言説の次元だけでなく、結節点やネットワーク形成の次元と、実際に人々が集まりコミュニケーションを交わす行為の次元を捉える必要があるのだ。白岩が1990年代に取り組んできたような、「場所」の存在様式である施設や組織を対象に据える参与観察の方法論が、改めて重みを持つ。

「都市エスニシティ」論がコミュニティ研究にもたらした重要な着眼点が、もう一つある。移動性を前提としつつ具体的な「場所」で生起する一時的な領域性と、その周期的なパターンである。広田はそれを「メンバーの非固定性、教会やモスクその他移動の施設を中心にした、時に居住の近接性に基づかない『社会的集合』や『社会的凝集』」として捉える⁶⁴⁾。こうした「一時的な社会的凝集」は、次のような複数「出来事」のエピソードとして記述される。

浜松町の海岸通りから少し入ったところに「レストランP」はあった。日系南米人だけのディスコ・パーティは土曜の夜から日曜の朝までここのフロアを借り切って開かれた。土曜の夜がふけだすころになると、ジーンズをはいた日系の若者たちがこのレストランの周囲に集まりだす。このディスコに通う若者たちの大半は10代から20代の若者たちである。多くは就労のために日本にきた人々であるが、ときに、人材派遣業の社長が従業員の慰安のためにグループをなしてくることもある。ディスコは彼らにとってはダンス・パーティの延長である。日本では大勢の人が集まれる場所を確保できないため、ディスコを開催せざるを得ないという事情もある。特にブラジル系の人々の集まるときはほとんどがガラナやほかの清涼飲料水で、アルコールはほとんど出ない。そのため10代の若者たちや、ときに家族連れも見ることがある⁶⁵⁾。

境町の場合、太田市・大泉町と伊勢崎市にはさまれて日系人の数も次第に増えてきた町であるが、伊勢崎市のモスクとは異なるモスクの建設がおこなわれて以来、この町に数箇所のハラール・フードの店もでき、毎土曜日ごとにイスラム系住民が集う。明らかにここには、異質なライフスタイルのアンクレーブが一時的にしかし定期的に形成される⁶⁶⁾。

例えば、モスク等の施設を中心に多くの人々が集まるが、その集まりは常態化しておらず、たしかにハラルフード店等を中心に日常的な集合はあるが、時に潮が引くように目に見える社会的集合は姿を消す。しかしその時点でも確かにそこには「イスラム・スポット」と呼びうるような、人々の「社会的凝集」を感じとることが出来る（……）。おそらくそれは、そこにそうした「領域」を象徴する何かが存在する⁶⁷⁾。

三つの事例は、それぞれ異なる場所と時期のものである。東京浜松町のレストランのディスコ・パーティは1990年代に、群馬県境町のモスクは2000年代に、東京新宿のモスクと「イスラム・スポット」は2010年代に記録された。しかしそこには、毎週末、一つの施設に移動する人々が集まり、生身の身体を持つ人間として顔をあわせ、交流することのできる時間と空間が生まれていた。それは確かに「一時的な社会的凝集」に過ぎないのだが、特定の「場所」に蓄積されたネットワークや象徴が利用されることによって、繰り返し生起する。そこに集う人々は、必ずしも「近隣」の住民とは限らない。広田はこれを「居住の近接性に基づかないコミュニティ編成原理」と呼ぶが、こうした認識は明らかに奥田の「都市コミュニティ」論を越え出ている。西澤の批判を受けたように、奥田は最後まで「居住世界」に拘り続けたからだ。

「都市エスニシティ」論が提起した、「一次的な社会的凝集」の周期的な形成をコミュニティの指標として扱う認識論は、コミュニティ研究の時間論的転回とも言うべきものではないだろうか。移動性によって特徴付けられた「越境する社会的領域／空間」という社会認識を前提としながら、それでもなお社会空間上に、ある特定の瞬間には立ち上がる領域性をどう捉えるのかという問題である。現代の都市社会において、コミュニティの領域性は確固たる実体としては存在しないが、具体的な「場所」を起点として時間論的に生起する。「場所」は開放性と閉鎖性の両義的な契機を持つ。開放性の契機は移動とネットワークの「繫留点 (anchor point)」であり、閉鎖性の契機は社会空間を一時的に切断する「待避所 (asylum)」である⁶⁸⁾。こうして「ポストモダン・コミュニティ」の移動性と領域性という難問——領域性／脱領域性という両義性は、時間論的に位置付けなおされることになる⁶⁹⁾。

白岩と広田それぞれの調査実践は、奥田の「コミュニティとエスニシティ」研究が切り開き、そして直面した方法論的問題に対する二つの回答である。両者とも共通しているのは、施設や組織それ自体を閉じた実体として切り出すのではなく、ネットワークの結節点として描き出したことである。これにより、地域研究において捨象されがちであった、多様な移動性を持つ人々が織りなす社会過程を捉えることが可能となった。広田はネットワークの形成過程を辿ることによって、「結節装置」の地理的な凝集を「場所」として描き出した。既に述べた通り、「場所としての地域」という視角はネットワーク分析と地域研究とを架橋する可能性を持つ。白岩はさらに、特定の施設での長期間にわたる参与観察を通じて、ネットワークの結節点で交わされ

るコミュニケーション過程を、具体的な「出来事」のエピソードとして記述した。ただし白岩の問題関心は「エスニック・ビジネスの生成過程」にあり、「出来事」からコミュニティの「境界の象徴的構築」や「対話的な帰属の経験」を読み解いたわけではない。広田は白岩ほどに継続的な観察を行ったわけではないが、「ディスコ・パーティ」やモスクの事例を通じて、「一時的な社会的凝集」の持つ領域性を描き出した。

出来事の記述によるコミュニケーション過程の分析と、「場所としての地域」研究によるネットワーク形成の歴史社会的条件との分析とが合わさった時、移動性と領域性という「ポストモダン・コミュニティ」の難問に取り組むための、経験的研究の回路が開けるのではないだろうか。ただし「場所」と「出来事」の研究を進める上で、少なくとも三つの時間幅を設定しておく必要があると考えられる。第一に、「場所としての地域」への歴史文化的資源の蓄積という数十年から数百年の歴史、第二に、資源獲得と意味付与の闘争／協働である「場所形成」をめぐる数カ月から数十年単位の短い歴史、そして第三に、特定の「場所」で「一時的な社会的凝集」が生起する「出来事」の瞬間である。次章では本稿の締めくくりとして、「出来事」とその背後にある社会過程の連続と断絶に着目する調査研究の基本的方針を提起したい。

4. おわりに——「場所」と「出来事」の比較研究へ向けて

4.1 経験的研究の足場——〈実態的地域〉、「出来事」と「水脈」

本稿が探究してきたのは、制度化された諸組織の「裂け目」に存在する、人びとの「無数の形をなさない諸関係」と「泡立つ活動」を捉えるための、コミュニティ研究の方法論であった。しかし本稿には、ある「場所」において生起する「泡立つ活動」が、資本主義によって増大する災害やポスト福祉国家の「選択と集中」に抵抗する「芽」となるか否かの評価を下す用意はない。極めて抽象度の高い概念に基づく同時代認識から、中範囲の現実を跳躍して為される事例への性急な意味付与は、制度化の「成功例」のみを切り出す知的態度と、それほど大きな違いはないと思われる。

本稿で繰り返し主張してきたのは、たんに複数の方法論を組合せよということではなく、認識論的な転換に相応しい方法論がなければならない、ということである。ポストモダン理論は様々な概念を生み出し、既存の認識論——例えば整合的な実体としての社会認識——を相対化した。しかし既存の方法論の見直しは同様には進展せず、両者の間の断絶が拡がっている。コミュニティ研究について言えば、古典的な組織論(行政区分を与件としてのアソシエーション調査)、それを批判するネットワーク分析と構築主義的な言説分析に分裂し、その間隙は埋められていない。コミュニティの断片化という認識は、もちろん移動性の増大による社会関係の脱領域化という実態(real conditions)を捉えてはいるが、それ以上に方法論そのものの断片化を反映しているのではないか。実態としての対象の持つ複合的な社会過程を総体として捉えることの

できるような、経験的研究の新たなフィールドを設定する必要がある。

本稿が見出した「都市エスニシティ」論以降のコミュニティ研究のフィールドは、「場所としての地域」である。「場所としての地域」とは、移動性と社会関係の脱領域化という状況において、人々が生身の身体を持つ存在として出会い、コミュニケーションを行うための社会空間である。その存在様式はネットワークの結節点となる施設の地理的凝集であるが、その背後には施設の存立、移動とネットワーク形成、コミュニケーションを支える歴史社会的条件が存在する。これらの物的装置と歴史社会的条件の総体を、〈実態としての地域（real conditions of a region）〉と呼びたい⁷⁰⁾。〈実態的地域〉は不変的な実体（substance）ではない。その明確な境界は存在せず、記述の範囲は操作的に定義される。しかし同時に、いかなる範囲設定にも包摂されない「無数の形をなさない諸関係」の存在が想定される。〈実態的地域〉を構成するのは定住者だけでなく、多様な移動性を持ち「場所」と関わるあらゆる人々である。すなわち「場所としての地域」とは、〈実態的地域〉の機能的な一側面である。そして重要なことは、〈実態的地域〉の「内部」であれ「外部」であれ、記述の範囲から取りこぼされる要素が常に存在し続けるという論理的な設定である。

それでは、こうした〈実態的地域〉をフィールドとして「都市エスニシティ」論以降のコミュニティ研究は何を捉えるのか。本稿が対象として見出したのは、「一時的な社会的凝集」として観察される、個別具体的なコミュニケーション過程としての「出来事（events）」である。研究対象を極めて短い時間で分節化することによって初めて、私たちはコミュニティの領域性が構築される瞬間、またそれらが作り直されていく瞬間を捉えることができる。「出来事」を分析単位とすることによって、ある特定の時間幅と別の時間幅との比較が可能となり、それが特殊な一回性の現象なのか、周期的なパターンを持つ現象なのかを明らかにすることができる⁷¹⁾。そして特定の時間幅におけるパターンの連続性はその背後にある社会過程の持続の、パターンの変化は社会過程の断絶の指標として捉えられるだろう。こうして「出来事」と、その歴史社会的条件としての〈実態的地域〉との連関を捉える回路が開かれる。

「出来事」を歴史社会的条件から切り出し実体化するのではなく、その背後にある社会過程との連関を捉えることの重要性は、メルッチの『現在に生きる遊牧民』において既に指摘されている⁷²⁾。メルッチは運動を「可視性／潜在性（visibility/latency）」概念によって分析し、「可視的な」集合的動員へのポテンシャルは、日常生活におけるネットワーク形成やコミュニケーションのなかに「潜在」しており、支配的な文化コードに抗するオルタナティブな意味は、むしろこうした潜在性の位相において生成されると主張する。新原もまた、可視性／潜在性の“境界領域”を“未発の状態（stato nascente）”という概念によって捉える⁷³⁾。こうした認識論において、「出来事」は潜在的な社会過程（latent processes）の「波頭」として把握される。本稿では、この持続と断絶双方の契機を持つ潜在的な社会過程を「水脈」と呼びたい⁷⁴⁾。これが

コミュニティ研究の捉えるべきもう一つの対象である。

「水脈」への着目は、「惑星社会研究会」や「“うごきの場”研究会」において共有され繰り返し検討されてきた認識論であるが、その指標はいったい何なのか、経験的研究の方法論についてはほとんど詰められていないと言ってよい⁷⁵⁾。実際の調査方法 (methods) については、参与観察／参加型アクション・リサーチを含む徹底的な記録に基づく「出来事」のエピソード記述という技法 (art) が、集团的に蓄積・伝承されてきた⁷⁶⁾。しかし「出来事」とその背後にある「水脈」との連関を分析し、〈実態的地域〉の歴史社会的条件との間で、一定の蓋然性を持つ社会科学的な説明を行うための方法論は、未開の大地 (frontier) として残されている。これは各自のフィールドのなかで、また各自の問題関心およびテーマ設定との間で、それぞれが錬成・錬磨すべきものであり、既に切り開かれた認識論的な地平に「後から続く者」の使命である。それゆえ本稿の最後に、個別具体的な「出来事」を経験的な足場として「水脈」を捉えるための分析枠組を提起したい。

4.2 「出来事」と「水脈」の分析枠組——コミュニティの三つの位相

コミュニティは複数の理論的系譜から、社会関係として、社会集団として、また象徴として扱われてきた。こうした還元主義的な見方が方法論の断片化を生んだのだとすれば、私はこの逆の道を歩みたい。つまり、コミュニティを三つの位相が絡み合う複合的な社会過程と見なし、分析するのである⁷⁷⁾。

第一の位相は、R. パーク (Robert Ezra Park) が「居住者の共棲的關係 (symbiotic relationships)」と捉え⁷⁸⁾、その後ウェルマンらが脱領域的なネットワークとして捉え直した、社会関係としてのコミュニティである。初期シカゴの「人間生態学 (human ecology)」の焦点であったこの位相を、「関係的位相 (relational aspect)」と呼ぶことにしよう。

第二の位相は、マッキーバーが「枠組の構造」と捉えた、諸アソシエーションの連関としてのコミュニティである。行政区分としての「コミュニティ」認識と親和性が高く、日本の地域研究において意識調査の対象として用いられたこの位相を、「制度的位相 (institutional aspect)」と呼ぶことにしよう。パークは「共棲 (競争) 的關係」だけでなく、そこから起ち上がる社会秩序に着目したが、これはコミュニティの関係的位相と制度的位相との相互連関を総体として把握する試みであった。

第三の位相は、デュルケムが「集合的沸騰」の焦点として捉え、コーエンが「境界の構築」と捉えた、象徴としてのコミュニティである。構築主義アプローチの焦点となるこの位相を、「象徴的位相 (symbolic aspect)」と呼ぶことにしよう。デランティの「対話的な帰属の経験」の契機もまた、この位相に含まれる。

現代のコミュニティ研究において、三つの位相の相互連関の過程を捉えることは容易なこと

ではない。既に述べたように、高い移動性によって特徴付けられた都市社会では、対象を整合的な実体として設定することが困難なためである。しかし個別具体的な「出来事」というフィールドにおいて、時間と空間を極めて限定することで、コミュニティの複合的な過程を総体として観察する道が開かれる。「水脈」とはすなわち、特定の「場所」で生起する「出来事」を認識媒体として浮かび上がってくる、コミュニティの三つの位相の連続性に他ならない。

あるいは次のように考えられるかもしれない。「出来事」と「水脈」とは、コミュニティの可視性と潜在性という二つの側面である。「出来事」の時間と空間において観察されるのは、「一時的な社会的凝集」であり、マッキーバーが「一時的なアソシエーション」、バウマンが「ペグ・コミュニティ」、デランティが「ポストモダン・コミュニティ」と呼ぶ社会的実在である。特定の「出来事」——全てではない——において、コミュニティの三つの位相は相互に絡み合い、強固な体制を形成し、整合的な実体として捉えられ得るような強い領域性を構築するかもしれない。ただしそれは「一時的な体制（temporal formation）」であり、永続することはない。しかしもし、「出来事」の背後にある歴史社会的条件が持続するならば、「一時的な社会的凝集」は領域性を変化させつつ、特定の「場所」に繰り返し生起することだろう。

果たして「水脈」としてのコミュニティは、マッキーバーの主張するように「不滅」なのか。どの位相がどの程度変化したとき、「水脈」は断たれるのか、あるいは形を変えて持続していくのか。どのような時間幅においての断絶と持続なのか。本稿が設定した三つの位相——关系的／制度的／象徴的位相——以外の重要な〈実態的地域〉の構成要素を、あるいはそれらの存立条件を見落としてはいないか。こうした問いに答えるためには、「場所」と「出来事」の歴史的・地域的な比較研究が必要となる⁷⁹⁾。本稿はその序説にすぎない。

注

- 1) MacIver, Robert M., *Community: A Sociological Study; Being an Attempt to Set Out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*, 3rd ed., Macmillan and Co, 1924. = 中久郎・松本通晴監訳『コミュニティ—社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』ミネルヴァ書房, 1975年, 239ページ。
- 2) Melucci, Alberto, *The Playing Self: Person and meaning in the planetary society*, Cambridge University Press, 1996. = 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 72ページ。
- 3) 以下の記述は2015年5月10日の著者の日誌に基づく。cf.『地域社会学会会報』No. 191, 2015年6月15日。
- 4) 2015年5月10日の日誌より。
- 5) ただし友澤の言葉の背後にあるのはマッキーバーの議論ではなく、「生命は泡から生まれた」という創発性（emergence）の心象である。
- 6) マッキーバー, 前掲書, 47ページ。
- 7) 岩崎信彦・上田惟一・広原盛明・鯉坂学・高木正朗・吉原直樹編『町内会の研究』御茶の水書房,

- 1989年、476-7ページ。2013年に出版された「増補版」では、中略箇所新たな文章が挿入されているが、引用箇所の文章に変更はない(603ページ)。
- 8) 既に述べたように、マッキーバーはコミュニティをいかなる組織体に還元することも拒否する。そして諸アソシエーションの相互連関を明らかにしても、捉えられるのはコミュニティの「枠組の構造」にすぎないと主張する。(マッキーバー、同上書、153ページ)
- 9) “coherence”の概念は、R. N. ベラー (Robert Nelly Bellah) の主著『心の習慣』に示唆を得ている。ベラーは合衆国の白人中産階級の「モーレス」の調査を通じて、分離 (separation) と個体化 (individuation) に対抗する社会の「全体整合性 (coherence)」の可能性を捉えようとした。ただしそれは、権威主義的国家への統合でも復古主義でもなく、「伝統を生かし直すこと (reappropriating tradition)」によって再創造されるものである。(Bellah, Robert N. et al., *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press, 1985. = 島園進・中村圭志訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房, 1991年.)
- 10) マッキーバー、前掲書、153ページ。
- 11) 地域社会学者の中澤秀雄は、「政策や生産関係、または集団・団体・階級によって構造化されない領域が地域にあらわれ、この『すき間』ないしは『裂け目』(cleavage) というべき部分がむしろ地域を支えたり変動させたりしているといつてよい状況」の出現により、戦後日本の地域社会学の中心的方法論であった「構造分析」が限界に直面したと述べている。(中澤秀雄「地方自治体『構造分析』の系譜と課題：『構造』のすき間から多様化する地域」蓮見音彦編『村落と地域 講座社会学3』東京大学出版会、2007年、187-8ページ.)
- 12) 岩崎信彦「思い出すこと・思うこと」『地域社会学会会報』No. 200, 2017年、6ページ。
- 13) その詳細は、本年報所収の新原道信論文を参照されたい。
- 14) 新原道信、鈴木鉄忠、大谷晃、竹川章博、鈴木将平、飯島章太、利根川健を主な参加者として、2016年9月より継続している。2016年12月に“うごきの比較学”研究会へと改名した。ただし実質的な議論は、新原・鈴木と筆者の間で行われてきた。
- 15) 本年報所収の鈴木鉄忠論文は、歴史学者のF. ブローデル (Fernand Braudel) を参照軸としつつ、地中海世界の文脈から「集合的な出来事」と「日常性の構造」の動態を比較するための認識論・方法論を検討しており、今後、日本社会の文脈から書かれた本稿の知見と対話させていきたいと考えている。
- 16) 本稿では「移動性 (mobility)」を、E. バージェス (Ernest Watson Burgess) と磯村英一の議論を元に、次のように規定する。第一に、都市圏への人口流入／流出という居住地の移動である。第二に、都市圏において日常的に繰り返される居住地から就業地への移動である。第三に、余暇活動における一時的滞在である。これはそれぞれ、磯村の「第一の空間 (住居)」「第二の空間 (職場)」「第三の空間 (盛り場)」に相当する。(Burgess, Ernest, “The Growth of the City: An Introduction to a Research Project.” in Robert E. Park and Ernest W. Burgess (eds.), *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, University of Chicago Press, 1984, pp. 47-62. = 松本康訳「都市の成長—研究プロジェクト序説」松本康編『近代アーバニズム 都市社会学セレクション I』日本評論社、2011年; 磯村英一『人間にとって都市とは何か』NHKブックス、1968年.)
- 17) バージェス、前掲書。
- 18) Wirth, Louis, “Urbanism as a Way of Life,” *American Journal of Sociology*, 44, University of Chicago Press, 1938, pp. 1-24. = 松本康訳「生活様式としてのアーバニズム」松本康編『近代アーバニズム 都市社会学セレクション I』日本評論社、2011年。
- 19) Wellman, Barry, and Barry Leighton, “Networks, Neighborhoods, and Communities: Approache to

- the Study of the Community Question,” *Urban Affairs Review*, Vol. 14, No. 3, 1979, pp. 363-90. = 野沢慎司訳「ネットワーク, 近隣, コミュニティー—コミュニティ問題研究へのアプローチ」森岡清志編『都市空間とコミュニティ 都市社会学セレクションII』日本評論社, 2012年.
- 20) Durkheim, Emile, *Les Formes elementaires de la Vie religieuse: Le Systeme totemique en Australie*, Paris, 1912. = 古野清人訳『宗教生活の原初形態』上下, 岩波文庫, 1975年.
- 21) Turner, Victor W, *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*, Aldine Publishing Company, Chicago, 1969. = 富倉光雄訳『儀礼の過程 (新装版)』新思案社, 1996年.
- 22) Cohen, Anthony P, *The Symbolic Construction of Community*, Ellis Horwood Ltd, 1985. = 吉瀬雄一訳『コミュニティは創られる』八千代出版, 2005年.
- 23) Bauman, Zygmunt, *Community: Seeking Safety in an Insecure World*, Polity Press, 2001. = 奥井智之訳『コミュニティ—安全と自由の戦場』筑摩書房, 2008年.
- 24) 同上書, 92-3ページ.
- 25) 同上書, 101ページ.
- 26) Delanty, Gerald, *Community*, Routledge, 2003. = 山之内靖・伊藤茂訳『コミュニティ—グローバル化と社会理論の変容』NTT出版, 2006年.
- 27) 同上書, 195ページ.
- 28) 同上書, 264ページ.
- 29) 同上書, 261ページ.
- 30) メルッチ, 前掲書.
- 31) デランティ, 前掲書, 262-4ページ.
- 32) 同上書, 267ページ.
- 33) 同上書, 272ページ.
- 34) 同上書, 299ページ. 山之内靖「訳者解説—グローバル化と社会理論の変容」より.
- 35) 本稿では検討する用意がないが, 集会的な自己と他者の境界と集合体への同一化というモチーフからは, 明らかに「集合的アイデンティティ (collective identity)」のテーマが浮上する. ここに地域研究と社会運動研究の交点としてのコミュニティ研究という設定の含意がある. (cf. Melucci, Alberto, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia: Temple University Press, 1989. = 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店, 1997年.)
- 36) 吉原直樹『コミュニティ・スタディーズ—災害と復興, 無縁化, ポスト成長の中で, 新たな共生社会を展望する』作品社, 2011年, 32ページ.
- 37) ポストモダン理論に基づく方法論こそが問題であるという論点は, 似田貝香門の以下の批判とも呼応する. 「それはひとえに, 『空間論』や新都市社会学の方法を, 具体的な『地域社会』の諸経験の中で検証し, 主体・構造を巡る, 新たな方法論への構築へと向かう力が乏しかったといえる. 今や伝説ともなった『物 (実証研究) を持ってこい』(鎌田とし子), とは創設メンバー世代の時期世代へのフラストレーションともいえよう. この学会の伝統であった理論—実証研究の再生が強く望まれる。」(似田貝香門「地域社会学『通信』200号に寄せて—主体と構造を巡る変遷と課題』『地域社会学会会報』No. 200, 2017年, 4ページ.)
- 38) 本章の記述は, 2016年7月16日に開催された第3回惑星社会研究会(主催「惑星社会と臨場・臨床の智」チーム)で行った報告に基づく.
- 39) 奥田道大編著『都市エスニシティの社会学—民族/文化/共生の意味を問う』ミネルヴァ書房, 1997年.
- 40) 同上書, 2-3ページ.

- 41) 同上書, 5-7 ページ.
- 42) 奥田道大『都市コミュニティの理論』東京大学出版会, 1983年, 105ページ.
- 43) 奥田道大・田嶋淳子編著『池袋のアジア系外国人—社会学的実態報告』めこん, 1991年;奥田道大・田嶋淳子編著『新宿のアジア系外国人—社会学的実態報告』めこん, 1993年;奥田道大・鈴木久美子編『エスノポリス・新宿/池袋—来日10年目のアジア系外国人調査記録』ハーベスト社, 2001年.
- 44) 奥田道大『都市コミュニティの磁場』東京大学出版会, 2004年, 76ページ.
- 45) 同上書, 8 ページ.
- 46) 注16参照.
- 47) 西澤晃彦「『地域』という神話—都市社会学者は何を見ないのか?」日本社会学会『社会学評論』第47巻1号, 1996年.
- 48) 同上書, 59ページ.
- 49) こうした学生たちの研究成果のほとんどは刊行されることなく, 修士論文や卒業論文として中央大学大学院図書館と社会学共同研究室に所蔵されている.
- 50) 白岩砂紀『エスニック・ビジネスの生成に関する事例的研究—広がるネットワークと起業家精神』中央大学大学院修士学位論文, 1995年;白岩砂紀「エスニック・ビジネスの生成に関する事例的研究」奥田道大編著, 前掲書, 1997年;白岩砂紀「エスニック・ビジネスの生成過程—広がるネットワークと起業家精神」渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編著『都市的世界/コミュニティ/エスニシティ—ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』明石書店, 2003年.
- 51) 白岩, 前掲書, 1997年, 90ページ.
- 52) 白岩, 前掲書, 1995年.
- 53) 広田康生『エスニシティと都市』有信堂, 1997年;広田康生『エスニシティと都市(新版)』有信堂, 2003年.
- 54) 広田, 前掲書, 2003年, 58ページ.
- 55) 同上書, 116-7 ページ.
- 56) 広田康生・藤原法子『トランスナショナル・コミュニティ—場所形成とアイデンティティの都市社会学』ハーベスト社, 2016年.
- 57) W. ファイアレイ (Walter Firey) の「空間言及感情 (spatially referable sentiments)」に示唆を得ている。(Firey, Walter, "Sentiment and Symbolism as Ecological Variables," *American Sociological Review*, Vol. 10, 1945, pp. 140-8. =松本康訳「生態学的変数としての感情とシンボリズム」森岡清志編『都市空間とコミュニティ 都市社会学セレクションII』日本評論社, 2012年.)
- 58) 広田・藤原, 前掲書.
- 59) 阪口毅「移動の歴史的地層—新宿大久保地区の空間の定義をめぐる差異とコンフリクト」新原道信編著『境界領域』のフィールドワーク—“惑星社会の諸問題”に回答するために』中央大学出版部, 2014年.
- 60) 阪口毅『「都市コミュニティ」の移動性と領域性に関する調査研究—インナーエリア・新宿大久保地域と「集会的な出来事」のエスノグラフィ』中央大学大学院博士学位論文, 2016年. 「第一空間」「第二空間」「第三空間」については注16を参照されたい.
- 61) 私はこうした空間への言及によって抽象化・象徴化された「場所」の表象を〈象徴的空間〉という用語によって捉えている. 大久保地域において, 中国系食材店に集まる人びとにとって, 韓国系教会に集まる人びとにとって, あるいは韓国系親睦団体に集まる人びとにとって, 地域には異なる心象が投影され, それによって起ち上がる〈象徴的空間〉は異なる. また同じ時代の久保地域, 例えば戦後復興期に居合わせたはずの, 疎開先から戻ってきた「鉄砲組の末裔」たちと移住者の第二世代たち, 起業のため移住してきた商店主たち, 朝鮮人バラックの住民たち, 「ドヤ」の住民たち,

それぞれにとって大久保地域に投影する心象は異なり、準拠する〈象徴的空間〉は異なることだろう。（同上書）

- 62) 白岩, 前掲書, 1995年, 112ページ.
 63) 広田・藤原, 前掲書, 198ページ.
 64) 同上書, 166ページ.
 65) 広田, 前掲書, 2003年, 112ページ.
 66) 同上書, 296ページ.
 67) 広田・藤原, 前掲書, 166ページ.
 68) 新原道信とA.メルレル (Alberto Merler) の「島嶼社会」論を参照するならば, 社会空間に浮かび上がる「島々」が可能態として存在し, それを回路として人びとが移動し, ネットワークが切れたり繋がったりする動態として描けるだろう. 領域性/脱領域性とは, 「島」の閉鎖性と開放性の弁証法的な契機である. (新原道信「境界領域」のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編著『境界領域』のフィールドワーク—“惑星社会の諸問題”に回答するために』中央大学出版部, 2014年; Merler, Alberto, “Mobilitate umana e formação do novo povo / L’azione comunitaria dell’io composito nelle realtà europee: Possibili conclusioni eterodosse,” 2006. =新原道信訳「世界の移動と定住の諸過程—移動の複合性・重合性からみたヨーロッパの社会的空間の再構成」古城利明監修『グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会 地域社会学講座2』東信堂, 2006年.)
 69) こうした領域性/脱領域性の時間論的な再配置は, 全く新しい議論というわけではなく, むしろ民俗学や人類学において基本的な「共同性」理解の一つである. むしろ国民国家をモデルとする「共同性」理解の方が, 「時間がかぎりなく空間化され, ある種奇妙にひずんだ変容・癒着をこうむっている」とは考えられないだろうか. (赤坂憲雄『異人論序説』ちくま学芸文庫, 1992年, 106ページ.)
 70) 以下の記述は (阪口, 前掲書, 2016) に基づく.
 71) ただし現象の「一回性/周期性」とは, 認識主体の持つ時間幅によって相対的である. 本稿では検討できなかったが, 歴史学者, 中井信彦の以下の議論を参照しつつ, 人間個体/人間集団/人間存在 (human being) の「一生」を時間幅とした「一回性/周期性」認識の差異を考察することを, 今後の課題としたい.

地方研究・郷土研究・民間伝承論そして民俗学などと, いくたびか呼び名を変えつつづけられた柳田の学問は, 事件の年代記としての文献史学が顧みることのなかった, 一回性のない歴史への挑戦であった. それは, 当事者が書きとめる必要も認めなかったような, ごくありふれた, くり返される日常の生活の歴史の発掘であった.

だが, だれもがすぐ気づくように, くり返しと歴史との間には撞着がある. 今日のわたくしは昨日のわたくしと同じではない. いかにくり返しのごとくにみえようとも, 個々の事実は, その歴史性においてとらえるとき, つねに一回起のものでしかないからである. それゆえに, 諸事実を, まさにその一回起性において, 因果連関的にとり扱おうとする古典的な文献史学の立場は, 正当性ととともに必然性をもあわせもつのである.

したがって, 本来一回起性的な諸事実を, くり返しとしてとらえかえすためには, 一回起的な諸事実内に内在する何らかの共通性を前提としてすえなければならない. 特に生活史という総合を目標とするなら, その共通性は, 生活の諸側面, 諸層位にとって共通のものでなければならない. 柳田史学は, この共通性をどこに見出していたのであったろうか.

いうならば, 人間が生きてあることの不安がそれであったと, わたくしには思われる. 寝食という類の生存そのものから, 生の終焉にいたるまでの, 生きてあることのすべてのディメンションにわたる不安が, そこには含まれており, それゆえにこそ生活の諸側面, 諸層位に共通の前提たりうるものと考えられたのではなかったであろうか.

所与の諸条件のなかで、この共通の前提に対処してきた人間の軌跡であればこそ、歴史が一回性のないものとしてとらえられると考えられたのではなかったか。(中井信彦『歴史学的方法の基準』塙書房、1973年、144-5 ページ。)

- 72) メルッチ、前掲書、1989年。
- 73) 最新の論考としては、新原道信「惑星社会のフィールドワークにむけてのリフレクシヴな調査研究」新原道信編著『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部、2016年。
- 74) 「水脈」という概念は、歴史学者、色川大吉の以下の記述に示唆を得ている。色川が主題としているのは明治期の自由民権運動における、定住者と漂泊者との出会い、読書会などの連なりがもたらした自由民権思想の広がりである。本稿の提起した「場所と出来事の比較研究」は現状では着想段階にすぎないが、今後、歴史的比較へと展開していきたい。
- 歴史に埋もれた人民の思想の地下水をさぐろう。そこに未来を拓く変革の契機—『未発の契機』をさぐろう。その歴史の底の水脈に自分の視座を据えないかぎり、真の思想の自由はありえない。内発的な道も求めえない、その底辺の視座から全歴史をとらえ直す方法をあみださなくてはならぬ。(色川大吉『新編明治精神史 色川大吉著作集第1巻』筑摩書房、1995年、547ページ。)
- 75) 阪口毅「“未発の状態”のエピステモロジー—『惑星社会のフィールドワーク』に向けて」『中央大学社会科学研究所年報』19、2015年。
- 76) それは例えば次のような方法の状況に応じた組合せである。(1)居合わせる：脇道にそれていく、偶然の出会いを引き受ける、巻き込まれていく、(2)複数のリサーチ・クエスション：調査研究に複数の意味を持たせる、別の可能性を考え続ける、(3)臆面のない折衷主義：対象に相応しい複数の方法を駆使する、必要があれば学ぶ、(4)ホーリスティック・アプローチ：あらゆるものを記録し集める、断念した感覚を覚えておく、(5)過程の記述：何かが生まれ壊れていく過程を記述する、モノログではなくポリログを捉える、(6)ふりかえる：後から気づく、その時を待つ、一度つくった説明図式を手放す。
- 77) コミュニティの三つの位相という着想は、(阪口毅「『都市コミュニティ』の創発性への活動アプローチ—大都市インナーシティ・新宿大久保地区の市民活動を事例として」『日本都市社会学年報』33、2015。)で提起し、(阪口、前掲書、2016年)で再定式化したものである。
- 78) Park, Robert E., “Human Ecology,” *The American Journal of Sociology*, 42(1), 1936, pp. 1-15. = 町村敬志訳「人間生態学」町村敬志・好井裕明編訳『実験室としての都市—パーク社会学論文選』御茶の水書房、1986年。
- 79) 民俗学者、桜井徳太郎は「結衆の原点」という概念によって、明治中期以降の地方村落組織のあり方(戦後の近代主義からは「封建遺制」として否定される)とは異なる、より長期的な歴史軸で持続してきた、小地域共同体の存続原理を捉えようとした。あるいは鶴見和子は、桜井の「ハレ／ケ／ケガレ」の循環構造図式と柳田国男の「定住／漂泊」概念とを組み合わせ、マツリという「ハレ」の「出来事」の時空間における定住者と漂泊者との出会いを社会運動への動因として把握する社会変動論を提示した。「結衆の原点」の循環構造は「出来事」の周期性と「水脈」の持続性を、「定住者と漂泊者との出会い」は「出来事」の一回性と「水脈」の断絶性ないし変化と捉えられるだろう。こうした歴史比較研究を今後展開していきたい。(桜井徳太郎「結衆の原点」鶴見和子・市井三郎編『思想の冒険—社会と変化の新しいパラダイム』筑摩書房、1974年；鶴見和子『漂泊と定住と—柳田国男の社会変動論』ちくま学芸文庫、1993年。)